

‘世界’の進化過程に於ける情報科学の位置

Position of Information Science in Evolutional Process of the ‘World’

佐藤 将博

この様な珍妙な表題の考察に思い至ったのは、ある会合(2013/12/27)で2011年3月11日の東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故が暗示する問題について「原子核研究と原発問題」と題して述べたが、その後の会合(2014/6/24)でそこで述べた見解を「原発事故が暴いた現代文明の危機」と題して敷衍したことに始まる。これらの話しの趣旨は、この事故は現代文明が人類の未来を危うくしている事実の象徴であり、その事実の理解には現代文明の「価値観」にまで遡って考察する必要がある、招来されようとしている危機の根本的な解決のためには、現代文明の「価値観」の転換が必要であると言う認識の表明である。

しかしながら、この認識は人類の悠久の繁栄を「価値」とする前提から引き出された結論であって、この前提の妥当性には吟味が欠けている嫌いがあった。つまり、人類は宇宙の進化即ち物質世界の時系列運動の結果として有形な物質的存在として誕生したのであり、その様な存在に悠久と言う言葉は当てはまらない、然るに人類の悠久の繁栄を前提する論議は成り立ち得ないかも知れないのである。即ち人間個人の運命はその願望とは裏腹に自己を形成する物質の時系列運動によって終わりを迎えねばならず、人類もまたこの様な個体の集合体としてやがて終わりを迎える運命にあると考えられる。つまり、生命は今を活

きる様に仕組みられた活動によって自己を維持し継承する仕掛で、その継続が生命の生涯なのである、したがって個別生命体の集合体である人類の歴史も同様と考えられる。それ故、人類は明日よりも今日を生きる生活を継続してきた結果として、資源枯渇や環境破壊などの人類の未来を危うくするような事態を招来しているのであり、それでもなお持続可能な開発などの美名の下にこの事実を隠蔽して経済成長を追求しているのである。つまり人類の生きる本能的活動様式には人類の悠久の繁栄を必然化する如何なる根拠も見出せず、人類の悠久の繁栄を「価値」とする前提の論議は成り立ち得ないと考えられる。

この思いが長らく胸につかえていたが、ひょんなことから「孫が可愛いのは何故か」との愚問に対峙しなければならなくなり、この問いへの答えが正に先の論旨の前提の妥当性の根拠と全く同じであり、それは生命の本能の意味を読み解くことによって得られるとの直観を得た。そこで本能の意味の考察を始めたのであるが、これらの問いへの答えは人間の論理ではなく自然の論理、即ち物質進化がもたらした生命の本能の論理から得られると理解するに到った。つまり人類の悠久の繁栄を「価値」とするのは、物質進化が人類の本能に組み込んだ「価値」であり、ここに先の論旨の妥当性が見出されるとの認識を得たのである。

あの愚問以来、本能の論理から現代文明の危機の要因とその回避の方途を模索してきた

が、その過程で人類の存在理由とその意味が‘世界’の進化過程の必然性の中に見出されること、そして人類の出現と人類による‘情報科学’の創造は、それぞれ‘世界’進化の質的に異なる段階を画する契機であるとの認識にも到達した。即ち‘世界’の進化は質的に異なる幾つかの段階を経て展開されており、知的生命つまり人類の誕生はこの展開の一段階を画す契機であり、人類によって創造された‘情報科学’はそれに引き継ぐ次の段階を画す契機と考えられるのである。この文では、これまでに得られた諸々の考察の内、‘世界’の進化過程における‘情報科学’の位置付けに限って報告する。以下の報告は、論理展開が極めて独断的で、内容が狂気の戯言と受け取られ兼ねないが、考察の全容が開示されたあかつきには、この暴論にも些かの首肯を頂ける筈である。

結論から述べると、‘世界’(物質的宇宙と精神などの物質の機能が生み出したものの全て)は「自己認識(‘世界’自身についての認識)」に向かって進化(時系列的運動)を続けており、‘情報科学’はこの認識機能の物質的論理的機構と機能を理解する、人類の手による‘世界’進化の新たな展開の手段となる科学である。太陽系では人類が‘世界’の「自己認識」の主体であり、そのミクロな物質系である神経系の機能によって‘世界’を感性的論理的に認知し記憶する即ち理解し学習すると共に、この機能の作動自体を認知するつまり意識できる存在である。つまり‘情報科学’は感性と思考の機構と機能、認知対象である‘世界’の諸種の表象、即ち‘情報’の処理に関わる事象を研究する科学である。この定義に異存があるにしても、「自己認識」へと向かう‘世界’の進化に果たす情報科学の役割、即ち‘世界’の進化過程に於ける情報科学の位置の理解の妨げにはならない。人類は、この科学の前進を通じて、‘世界’を感性的論理的に且つそのこと自体を意識的に認識できる人類を凌駕した

知的感性的且つ感情的能力をもった‘世界’の「自己認識」の物質的実体を創造し、この実体に自身の感性や感情を含めたその精神を移行させることによって自己自身を進化させ、その本能的欲求であった不老不死の願望を現実化させ、生命を誕生させた物質の進化を質的に新たな段階に発展させることができるようになる。つまり‘情報科学’は「自己認識」に向かって進化する‘世界’の進化過程に質的に新たな展開段階をもたらす契機なのである。

これまでの科学的認識から、生命はミクロな物質の複合体として発生し、その進化の頂点に物質とは異質な‘精神’を持った物質系である生命体即ち人類が誕生したことは疑い得ない。このことは、ビックバンに始まったとされる物質系の時系列的運動即ち宇宙の進化は、物質系の時空的膨張や複雑さの増大だけではなく、自己を再生する物質系である生命体へと進化し、更に生命体を媒介として非物質的な精神を出現させ、その働きによって物質的宇宙と精神世界を含む‘世界’即ち自己自身を認識できる方向へと進展してきた。つまり原初の‘無機的’存在が‘世界’の認識を可能とする‘有機的’存在である人類へと進化し、その人類が‘世界’の全面的「自己認識」を現実化する精神の発展の土台として‘情報科学’を創造したのである。

最後に本能の考察から、‘世界’は「自己認識」に向かって進化しており、全ての人間行為の「価値」の根拠がここから引き出されるとする考察の顛末に言及しよう。全ての生命体は、外界を認知する機能と外界に働きかける能力を持ち、これらの機能と能力によって自己を維持し継承する仕掛であるが、この仕掛の正常な働きが本能である。ミクロな物質系の進化から誕生した生命体は、その有限な生命を維持し継承するよう本能的に、つまり生命を形成するミクロな物質系の運動によって方向付けられているのであり、自由な意志と精神を持つとされる人間でさえこの本能の宿命か

ら逃れ得ない。先の愚問は、人間の意志や精神を拠り所として答えられるものではなく、正にこの宿命つまり生命体の継承欲求が人間の感情をも支配している証拠の表出なのである。この宿命は生命の尊厳や人権の尊重、自由や民主主義などの人間精神の生み出した中核的概念の形成にさえ及んでおり、これらの概念が「価値」とされるのは、その概念の現実化が生命体の維持と継承を要求する本能的欲求だからである。つまり、生命体はその永続性を求めるのはミクロな物質系の運動、即ち本能の必然的欲求であって、自殺という特殊な生き方を選択しない限り、自己意識を持ち自己決定権を持つように見える知的生命体である人類でさえこの欲求には逆らえないのである。人間は、その精神と意志によって自己決定できる存在であるが、その決定がしばしば自己の本能的欲求の反逆によって苦悩を経験せざるを得なくなるが、それはこの決定が‘世界’進化の必然内の決定能力によるものでなく、‘世界’進化の要求つまり本能から遊離した人間精神の恣意的な選択能力による決定だからである。

人類は、この惑星の生命体の中でその精神機能を最も発達させていて、それを能動的にさえ作動させることができるのであるが、大事なことはこの機能の作動は根底に於いては本能に支配されている事実である。その証拠は、全ての生命体の幼児は本能的な学習欲求を持っており、幼児がこの機能を能動的につまり意識的に作動させるようになるには学習が不可欠なことに現れている。即ち、意志などの精神機能はこの本能の学習によって陶冶されるのであって、精神や意志が先あって学習するのではない。つまり‘世界’の進化は、

学習意欲を即ち外界を認識する能力を生命体に本能として授けたのであり、それ故‘世界’は「自己認識」に向かって進化していると言えるのである。因みに人類に授けられた押さえ難い知的好奇心は学習や意志によっては得られない本能であり、この本能の充足に努力を惜しまず、その成果に無条件の喜びを抱きまた賞賛するのは何故か、我々はその根拠を「自己認識」に向かう‘世界’の運動つまり進化の必然性の中に観るのである。

現代に到る‘精神’の科学的認識の発展系譜は、古代に於ける原子論者が自然の思弁的考察から世界は原子と空虚のみからなり、精神活動をも含めて全ての事象は原子の配置と運動から理解できるとして、精神の実体性を否定し宗教を含めた観念論と対立するところから始まった。ルネッサンス期を経て啓蒙期に至って鍛えられた人間精神は、経験と実験を基礎とする生理学や医学などの科学的傍証から、精神を機械論的につまり生命体を構成する物質の機能として理解し、宗教的見解や観念論的理解を克服する努力をした。今日、生命科学や脳科学などに加えて情報科学や工学技術などの発展によって、精神の物質性の直接的検証も実践的課題に成りつつあり、長きに渡る唯物論と観念論の論争の決着もそう遠い先のことではないと思われる。本能の意味の理解に始まった考察は、この決着への道程が、人類を滅亡の淵へと誘いつつある現代文明の「価値観」を転換し、人類を‘世界’進化の予定する立ち位置に連れ戻すための未来の「価値観」を創造するための哲学の道であることを認識させるものになった。考察全容は別記の予定である。